

## 【2021年秋 新社長インタビュー】

### シコー白石忠臣社長

### 「一歩先のオモロイことを」

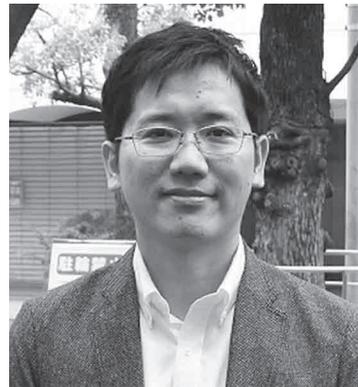
シコー(株)は、大阪紙工(株)として1950年に設立。以来、産業用包装容器の安定供給を使命に歴史を積み重ね、昨年設立70周年を迎えた。そしてこの6月には、白石忠臣氏が代表取締役社長に就任。新たな歴史を創ろうとしている。

本紙は9月某日、白石新社長に、就任後の心境、パッケージ産業の未来について、今後の抱負を伺った。(聞き手 本紙・米井一高)

——まずはご就任、おめでとうございます。現在のご心境は？

白石 ありがとうございます。コロナ禍での就任ということ、皆様から「たいへんですね」とお声を掛けて頂くのですが、自分としては嘆いても仕方がないのでとにかく前を向かなければ、と思っています。

就任前から感じていたことがあります。それはこのような状況下で、自分自身がお客様とお話ができていること、また、テレワークが多くなると社員とのコミュニケーションも希薄になってきているという事です。特にコロナで社会が変化し始めた昨年から、



「情報発信」「情報の共有化」という意識が自分の中でもっとも強くなりました。

#### 『シコータイムズ創刊』

白石 今年、関連会社の三栄紙工が90周年を迎えました。こういう状況なので、テレビ会議で三栄紙工の工場とつないで、10分だけと簡便に済ませたのですが、昨年はシコーが70周年で、やはり大きなイベントはできなかったという経緯があります。

「コロナ禍でも、会社の思いを発信したい、社員と想いを共有したいなあ」と感じていた矢先、今年の2月ぐらいに外部の会社から、社内的情報発信・共有アプリについて話を伺う機会がありました。「これはいい」と、すぐに興味を持ち、3月、4月と構想を練り、社長就任直後の7月

に念願の社内報をスタートさせました。

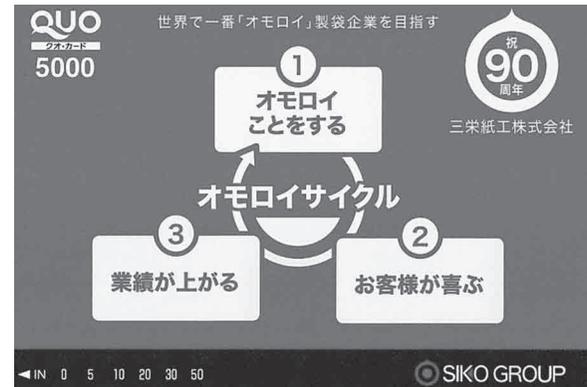
社内報は『シコータイムズ』という名称です。私の肩書は社長ではなく、「編集長」です。コメントの書き込みも可能なので、コメントを書いてくれた人には、私が返信しています。今は会社のメールアドレスを持っていない従業員が対象なので、年内にはスマホで扱える専用のアプリもできるので、工場の現場の方々とも、もっとコミュニケーションができて、より汎用性が高まる予定です。(※現在アドレスを持っていない従業員には印刷物として掲示している)

#### オモロイこと

白石 弊社は、この春に中期経営計画をスタートさせています。この中経、ちょっと変わっていて、キャッチフレーズが「オモロイことをする」なんです。

『オモロイサイクル』という図表があります。「オモロイことをすると、お客様が喜んでくださって、そして業績が上がる。業績が上がったら、またオモロイことできるよね」ということです。それを印刷したQUOカードも、三栄紙工90周年記念で社員に配りました。今回の社内報『シコータイムズ』も、まさに社内での「オモロイことをする」の1環なんです。

社員に配布したQUOカード



弊社の経営理念では、「感動の共有」という言葉を掲げています。これは、社内、社外に向けてです。相談役である父も10年以上、毎週ひとつ記事を書いて、社員に発信してきました。その理念と歴史を堅苦しくない形で受け継ぎ、発信したい、というのが白石忠臣版の『シコータイムズ』です。

シコータイムズを実際に発行してみても分かったのは、「自分ひとりではなく、若手と一緒にできるんだ」、「コメントも書いてもらえるんだ」という、会社やチームとしての強い一体感でした。地方の工場で働く若手社員から、社内報の内容に対する冷静なツッコミがデジタル上に投稿されたのを目にしたときは、まさに目から鱗でした。これぞ「シコー社員みんなの社内報」と

いう感じですね。

ちなみに、社内報とは別に現在は、シコーのビジョンを作るプロジェクトが動いています。そこには、役員、ベテラン、若手、女性、工場で機械を回してくれている社員が入っています。バラエティ感満載です。役員の人たちも「よく分からないけど、出席するわ(笑)」と言いながら、ZOOMで参加してくれているのですが、デジタルを利用した新しいプロジェクトをきっかけに世代や職域を超えた接点がととも増えています。

#### 新社長としての責任

白石 他の会社からご覧になっても、私はまだ社長としては若造だと思えます。時々はおモロイことを目指しすぎて、脱線することもあるかもしれません。しかし、相談役、会長、副社長含めて、皆、型にはまったやり方で物事を進めるタイプではないので、私がやることを許してくれますね。それと、私自身も、彼ら役員の存在をととも心強く感じています。そして、その世代がいなくなった時に、本当の意味で自分の資質が問われるのかもしれない、とも感じています。

今、これからを担う40代を中心とした研修をやっていますが、役員もその研修を見守ってくれています。自分が現

在の役員から教わったこと、つないでくれた人脈はととも大きかったので、次は私が30代、40代の次世代につないでいく番だと思っています。

ここまで歩んでくるにはキャリアで大いに悩みましたが、今は、ここでこうやって仕事をしたいという自分を100%肯定するようにしています。シコーで働けて良かったなあと感じ、感謝しています。会社の皆を巻き込んで仕事を共有化していくのは、「自分に戻したい」という気持ちがあるからかもしれません。

#### 製袋業界を考えて

白石 自身は、商売には「原価を抑えて作り、販売する努力」というのが、必要不可欠だと思っています。しかし、生意気ながら「それだけ」をやり続けることには限界を感じます。袋に、小さな穴を開けるとか、熱で変わったシールをして機能を付加する等をしてみるとか、他社様とは「ちょっと」だけ違う、オモロイことをしてみようとか、シコーらしさを加えたい、これが弊社の目指す方向です。『画期的なことはできなくても、お客様が求めているニーズをくみ取って、喜んでもらい次につなげる』、これが信念です。

クラフト紙袋の業界では、

小麦粉、セメント等のセグメントがありますが、シコーにはその中でのナンバーワンはありません。でもそれで良いのです。セグメントや業界よりも、お客様のニーズが先なので。切り口はニッチでかまわないと考えています。

### 5年後、10年後

**白石** 10年後には海外の売り上げ比率を上げたいです。自分の経験を活かし、海外での仕事量を増やすことができます。れば面白いと考えています。海外の展示会に赴き、デジタル化を推進しているのもその一環といえます。

もうひとつ。お客さまのニーズに対し、しっかりと応えていけば、600億円のクラフト重袋の市場にも可能性はあると感じています。製袋会社は歴史も長く、人と人のつながりを大切にしている良い意味でアナログな業界です。ですから、少し業界をデジタル化したり、他業界の良さを取り入れて技術を変化・革新したりすると、もっと市場は広がるはずだと信じています。

今後は少しでも、製袋業界、クラフト重袋市場にも未来はある、ということをホームページや社内報で社内外に発信していけば、若い人たちにも届くので

はないかと思っています。新しいことをやるためには、若い、新しい力が必要になりますから。

### これからのシコー

**白石** 『責任とリスクをとって、新しい仕組みを作る』と『僭越ながら、私の仕事はこうあるべきだと感じています。そして先代から受け継がれてきた社風と『オモロイこと』大阪のシコーらしさ』は、この先も大切にしていきたいと思っています。

【白石忠臣（しらいしたおみ）氏プロフィール】

▽生年月日 1982年3月28日  
▽2004年甲南大学経済学部卒業、同4月シコー㈱入社、同6月東京営業部勤務、2013年5月ミシガン州立大学大学院農学部パッケージ学科卒業、2013年6月事業本部部长代理、2014年6月取締役西日本事業部長、2016年6月常務取締役西日本事業部長、2021年6月代表取締役社長就任

